

# <膝栗毛もの>を描いた浮世絵師たち

- 芳艷・芳員・国周 重政を中心に -

康志賢(全南大学校)

## 1. 緒言

享和二・1802年十返舎一九作滑稽本『東海道中膝栗毛』に端を発した狭義の<膝栗毛もの>の図様を調べるために、合巻をはじめとする絵入り板本、揃物や絵双六をはじめとする浮世絵、役者絵や番付が残る芝居を穿鑿してきた。<sup>1</sup>そして、そのような<膝栗毛もの>の図様史において最も多大なる業績を残した広重に先んじて、<膝栗毛もの>の浮世絵を描いた先駆者として、実は北斎を挙げるべきであることを、拙稿2021<sup>2</sup>で論じており、本稿はそれに続くものである。そのような穿鑿の結果知り得た総計七十六種における<膝栗毛もの>の図様継承史を、拙稿2021で図示した次第である。本稿で取り上げる浮世絵師(太字)が、どのようなポジションを占めるのか一目でわかるようにするために、この拙稿の図表を再度ここに引用する。そして、本論に示す作品や図版には、この【図表1】の番号と一致するように番号を付すことで、該当作品を以て文学・絵画史における立ち位置が確認できるようにした。

※【図表1】<膝栗毛もの>の図様継承史(番号の順番は時系列) ; 発表時に提示予定

この中で版元と製作年度が判然としない<膝栗毛もの>⑬を描いた芳艷と、拙稿では気付かなかった<膝栗毛もの>の浮世絵である芳員画の㊦、国周画の㊠、重政画の㊤と㊭という三人の絵師の作品を、以下取り上げる。

## 2. <膝栗毛もの>を描いた浮世絵師たち

### 2.1 芳艷画『東海道中膝栗毛』の板元と制作時期について

「歌川芳艷」(慶応2年没)は一栄斎、後に一英斎と号す浮世絵師である。彼が描いた<膝栗毛もの>の中で、版元と製作年度が判然としない『東海道中膝栗毛』という揃物が存する。拙稿2017の書目年表稿では、嘉永年間刊行の⑬『東海道中膝栗毛』「御油赤坂の分」「四日市」「■■■■(「おる分」か)」「雲津」「ふちう(府中)」「岡崎」「大坂」として題名は示したが、「板元について詳述すべく、芳艷画膝栗毛関連別稿

<sup>1</sup>拙稿(2018.03)「<膝栗毛もの>の画題九種を通して見る相互影響関係考」『日本語文学』76号、韓国日本語学会(以下「2018①」と略称)。/省略/「<膝栗毛もの>作品群の書誌 - その図様継承史の一環として」『国語国文』923号、京都大学文学部国語国文学研究室(以下「2011」と略称)。/(2010.02)「<膝栗毛もの>の絵双六『しんはん東海道鬱散双六』・『五十三駅滑稽膝栗毛道中図会』の位置付け」『浮世絵芸術』159号、国際浮世絵学会(以下「2010」と略称)。/省略/(2006.02)「浮世絵に見る『東海道中膝栗毛』滑稽の旅」『浮世絵芸術』151号、国際浮世絵学会(以下「2006」と略称)。拙稿(2018.03)「万延期以降の<膝栗毛もの>作品群における書目年表稿」『日本語教育』83号、韓国日本語教育学会(以下「2018②」と略称)。/(2017.06)「安政期までの<膝栗毛もの>作品群における書目年表稿」『日本語教育』80号、韓国日本語教育学会(以下「2017」と略称)。

<sup>2</sup>拙稿(2021.04)「<膝栗毛もの>を描いた浮世絵師たち - 葛飾北斎を中心に」(『日本言語文化』54号、韓国日本語文化学会(以下「2021」と略称))

を期したい」と、課題として残したままである。該当する七図が見出せたので、ここでは一図ずつ取り上げて詳論する。<sup>3</sup>

i. 一■斎芳艶画にて⑬『東海道中膝栗毛』『御油赤坂の分』【図版 i】<sup>4</sup>には、いざり車の中で火を燃やす男を見て、大笑いする弥次郎と北八が描かれる。所載画像が小さいので改印は読み取れないが、「■」「■」というふうに、名主兩人双印であることは確認できる。原作 四編の御油・赤坂ではなく、五編下・雲津で胡麻汁宅を追出された二人が、夜道を歩く途中出会したいざり車に、自ら歩く家だと怖がる逸話がある。それを 御油・赤坂に転用して描いているのである。



東海道中膝栗毛 御油赤坂の分 歌川芳艶画

【図版⑬ i】『東海道中膝栗毛』『御油赤坂の分』

ii. また、一英斎芳艶画『東海道中膝栗毛』は嘉永期刊行と指摘する先行目録もある。『東海道中膝栗毛』『四日市』【図版 ii】<sup>5</sup>には、菰にくるまった石地蔵に驚く弥次郎と北八が描かれる。この弥次郎・北八の鼻の下に髭がある点、絵の雰囲気や草の表現方法、標題の書き方などが、前述「御油赤坂の分」の図様と相似ており、同シリーズであろうと判断した。これも画像が小さくて判読不可の名主兩人双印で、板元印は△を組み合わせた星形に「ヲ」の印である。この商標の板元は未詳で、『日本の版画の版元』に板元印【図ア】は紹介されるものの、「未詳、江戸」<sup>6</sup>とし、作例として書名と刊期のみ挙げる芳艶画の『東海道中膝栗毛』（嘉永二1849～四51年）はおそらく当該揃物であろう。



【図ア】『日本の版画の版元』/【図版⑬ ii】『東海道中膝栗毛』『四日市』

<sup>3</sup>以下、引用する芳艶、芳員、国周、重政の四人の作品に頭書する番号は、【図表1】と同様である。

<sup>4</sup>該当図版は『弥次喜多東海道展』(豊橋市二川宿本陣資料館所蔵、2001、pp.20)より転載。

<sup>5</sup> 綿拔豊昭『膝栗毛はなぜ愛されたか』(講談社、2004、pp.8)や「浮世絵で見る四日市」ブログ <http://asake.sakura.ne.jp/02asake/ukiyo/5.html> ( 検索日：2020.12.11 ) に所載され、図版は後者よりの引用

<sup>6</sup>Marks, Andreas(2011)『日本の版画の版元』(原著『Publishers of Japanese woodblock prints a compendium』) Hotei Publishing. pp.419

iii .そして、一英斎芳艶画『東海道中膝栗毛』『伊勢と都のおゐはけ』【図版iii】<sup>7</sup>は、日永の追分の「元祖まんぢう」茶店の障子看板の前で、弥次郎・北八が金毘羅参りの客「てしなつかい」と饅頭を賭けて、散々な目に合うという原話を描く。板元印は△を組み合わせた星形に「ヲ」の印。最早同シリーズとして企画刊行されたこと間違いないだろう。次の「雲津」と同じ改印、「濱」「馬込」「改」が確認できる。



歌川芳艶画「東海道中膝栗毛」

【図版⑬ iii】『東海道中膝栗毛』『伊勢と都のおゐはけ』



【図版⑬ iv】『東海道中膝栗毛』『雲津』 / 【図イ】図版ivの部分図

iv . 弘化四・1847年～嘉永五・1852年刊行として紹介、搭載される一英斎芳艶画『東海道中膝栗毛』『雲津』【図版iv】<sup>8</sup>は、検印が弘化四年～嘉永五年間に当たる「名主兩人双印」(『改印の考証』<sup>9</sup>)であるからだろう。当該図版には「濱」「馬込」【図イ】という名主の二印と、これと離れて白文で「改」字の小印が捺されていることが確認できるが、この形式は「嘉永元・1848年正月～嘉永三・1850年九月前後発行のもの」に付される副印」という『改印の考証』に従うと、当該錦絵の刊記を更に限定できる。板元印は△を組み合わせた星形に「ヲ」の印。「北八」と「弥次郎」が蒟蒻叩き石が分からず、石を食べようとするのを見て笑う「こまじる」という原話通りの絵組が置かれている。

さて、福地書店のブログ<sup>10</sup>に搭載される次の三図は、25×19cmの小判三枚で、同シリーズの前述の図様が鮮やかな多色摺りであるのに比して、藍・朱・墨の三色摺りに近い。

<sup>7</sup>前掲「浮世絵で見る四日市」ブログや綿拔豊昭著『NHKカルチャーラジオ文学の世界・江戸庶民のカルチャー事情』(NHK出版、2012、pp.1-175)に登載され、図版は後者よりの引用。

<sup>8</sup>当該画像は三重大学図書館蔵

[http://culgeo.i-portal.mie-u.ac.jp/kyodoshi/GIS/nishikie/prints/L\\_104.html](http://culgeo.i-portal.mie-u.ac.jp/kyodoshi/GIS/nishikie/prints/L_104.html) ( 検索日：2020.12.11 ) より転載。

<sup>9</sup>石井研堂著(1995)『増訂改版 改印の考証』芸艸堂、pp.23・24

<sup>10</sup>[www.fukuchishoten.com/blog/archives/2848](http://www.fukuchishoten.com/blog/archives/2848) ( 検索日：2020.12.11 )



v. 『東海道中膝栗毛』「ふちう（府中）」【図版v】の検印は、「■」「福」の名主兩人双印で「改」字の副印はない。版元印は山形の下に「与」なので、本郷に店があった太田屋多吉（『日本の版画の版元』・『近世書林板元総覧』<sup>11</sup>【図ウ】）であることがわかる。絵組は遊女「とこなつ」と「とこきく」（原話は「なつぎく」）に、浮気をして鬻をむしり取られた「ぎりつるきゃく」が鬻を指さしながら泣く、私刑場面を目撃して笑っている「北八・弥二郎平衛」という原話に準じた絵柄を置いている。



【図ウ】図版vの部分図 / 『日本の版画の版元』 / 『近世書林板元総覧』 / 【図版⑬v】『東海道中膝栗毛』「ふちう（府中）」

vi. 『東海道中膝栗毛』「岡崎」【図版vi】の検印は、判読不明の名主兩人双印で「改」字の副印はない。板元印は△を組み合わせた星形に「ヲ」の印である。水茶屋の床机に腰掛けた武士服装の「万嶺」（「万歳」か）と共の「才蔵」の前に平伏する「北八・弥二郎」という絵組だが、原話に相当する逸話はない。才蔵の振り分け荷物に鼓も入っているので、太夫と才蔵連れのように思われる。



【図版⑬vi】『東海道中膝栗毛』「岡崎」

/

【図版⑬vii】『東海道中膝栗毛』「大坂」

vii. 『東海道中膝栗毛』「大坂」【図版vii】は名主兩人双印とその外に、白文で「改」字の小印が付される。板元印は△を組み合わせた星形に「ヲ」の印である。「丹波の人」の柳行李に入っていた女房の遺骨を、漬け物だと勘違いして食べてしまった「弥二郎・北八」と、泣く「丹波の人」という原話のままの絵組が置かれている。

以上によって、一英斎芳艶画『東海道中膝栗毛』揃物の制作期は、嘉永元・1848年正月～嘉永三・1850年九月頃、版元は嘉永二・1849年～嘉永四・1851年の版行例を有する星形に「ヲ」商標の仔細不明の版元と、嘉永元・1848年～安政七・1860年の版行例を有する太田屋多吉によると結論づけられる。稿者の管

<sup>11</sup>『日本の版画の版元』(前掲書、pp.271)。井上隆明著(1981)『近世書林板元総覧』、青裳堂書店、pp.199

見に入った図版は以上の七図のみであったが、『膝栗毛』原話に従う他の宿駅図も描かれていた可能性はあろう。そのような図版の発見に本稿が寄与することを期待しつつ、制作年度や版元に関する確たる情報の出現が俟たれる。

## 2.2．新出<膝栗毛もの>の浮世絵四種

### 2.2.1.芳員画

### 2.2.2.国周画

### 2.2.3.重政画

## 3. 結 語

<膝栗毛もの>に携わった絵師が一目でわかるように、時系列で作成した【図表1】の総計七十六種の揃物・絵双六・玩具絵・絵入り版本・役者絵の中から、本稿では版元と製作年度が判然としない⑬を描いた芳艷と、拙稿では気付かなかった<膝栗毛もの>の浮世絵である芳員画の㊦、国周画の①、重政画の㊬と㊭という三人の絵師の作品を取りあげた。その結果、芳艷画『東海道中膝栗毛』揃物の制作期は、嘉永元年正月～嘉永三年九月頃、版元は嘉永二年～嘉永四年の版行例を有する星形に「ヲ」商標の仔細不明の版元と、嘉永元年～安政七年の版行例を有する版元太田屋多吉によることを論じた。猶、芳員画『東海道五十三次』「鞠子・藤枝」、国周画『童戯五拾三次之内』「四日市」、重政画『東海道中滑稽膝栗毛』「神奈川臺の茶や・程かや」「戸つかのさか道・藤沢」「桑名・みや」及び『膝栗毛滑稽辻占』を、狭義の<膝栗毛もの>浮世絵として新たに紹介できた次第である。